

備陽史探訪

第59号

発行

備陽史探訪の会

福山市多治米町5-19-8

TEL(0849)53-6157

地域史と山城跡

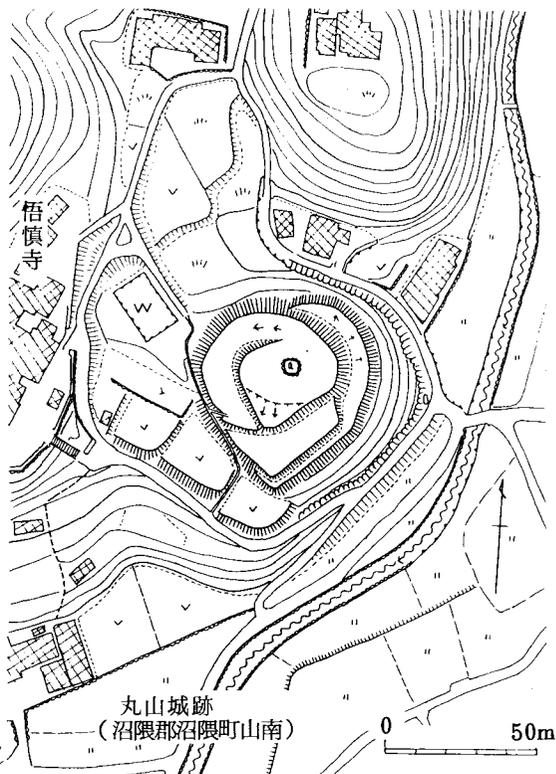
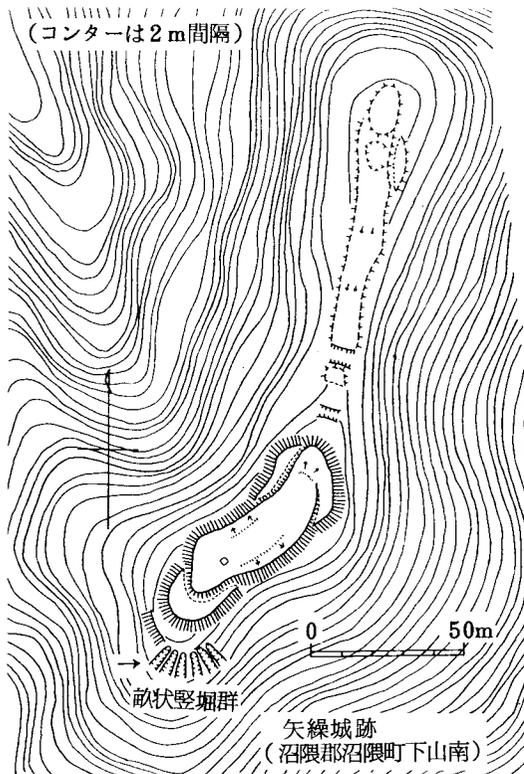
田口 義之

去る一月二十三日の総会で当会一周年記念事業として「山城探訪」の発刊(平成七年春刊)が決まった。山城の調査研究と備陽史探訪の会とは、切っても切れない縁がある。そもそも十四年前本会を結成したときの目標が「備後茨城・常城の発見と調査」であったのだ。懐かしく思い出すが、当時僅か十人前後の仲間が「茨城・常城は我々が発見する」といきり立ち、神辺や府中の山々を歩き回ったものである。

今回の企画は、古代山城ではなく、中世の山城である。「話が違いうじゃないか」と言われる向きもあるが、中世山城の調査は、そうした古代山城の調査の中から生まれたものである。古代山城の調査研究は、なるほど意義も大きく、反響も大きいだろう。しかし、そのニュース性だけで会を運営して行く訳にはいかない。

確かに一時そんな野心に捕らわれた時期もあった。しかし、それよりもっと身近で、文化財保護の観点からも放置され荒れるに任せている中世山城の調査こそ現下の急務ではあるまいか、と十年前に方針を変更し、以後福山市周辺の中世山城の調査研究を続けて来た。そして、その成果を広く皆さんにと企画したのが、今回総会でお諮りした「山城探訪」の発刊である。幸い本会の城郭研究会は部会長の出内さん以下情熱に溢れ、調査・執筆とも人材に事欠かない。また、古墳研究会・歴史民俗研究会の協力態勢も万全である。さらに会員諸氏の中にも調査に協力してやろう、という方も多い。「機は熟した」というのが私の感想である。

さて、前置きが長くなってしまったが、史料の少ない、地域の中世史研究に、山城調査は大変重要な意義をもっている。例えば、先月十六日、今回の調査で訪れた、沼隈郡沼隈町山南の矢線城跡と丸山城跡である。



この両城跡に学術調査の手が入ったのは今回初めてで（但し矢繰城跡は以前松永の藤井高一郎氏が測量され図面も作製されているが未発表）、その意味でもこの調査は大きな意味があったと思うが、さらに次の点で両城跡のもつ意味は沼隈町の中世史にとつて計り知れないほど大きいことが明らかとなった。まず、矢繰城跡で「畝状堅堀群」が発見されたことである。畝状堅堀群は、戦国中期に全国的に流行したものとわれ、中国地方では毛利系の山城に多いといわれる。このことは同城が戦国中期まで使用されたことを意味し、同時期まで沼隈郡南部に勢力をもった三原市八幡町の洪川氏との関連を改めて推測させるものである。何故ならば、同時期の洪川氏の当主義正の妻は毛利元就の妹で、同氏は毛利氏の庇護下にあったと推定されるからである。また、丸山城跡は、山南の肥沃な谷田地帯に臨んだ低い丘の上に築かれた土居形式の山城で、小規模ながらよく遺構を残し、中世山南郷の中心的位置を占めた山城と考えられる。城主と伝えられる桑田氏は、伝承ほどの大勢力であったか否かは別として、天正元年（一五七三）の洪川氏断絶以後は、山南の中心の勢力として在地を支配していたことは

間違ひなからう。

このように、山城の調査研究は、今までの郷土史の成果と相俟って、それを現地に残る遺構の面から新たに飛躍させる可能性をもつものである。今回の企画で取り上げた山城跡は三〇箇所過ぎないが、その発表の持つ意義は大きい。会員の皆さんのご協力を切に祈る次第である。

秋の古墳めぐりレポート

―雨の庄原に前方後円墳をみた―

山口 哲晶

今回のうつつ状態は近年になく長く続いた。毎年この時期になると、うつつの状態におそわれるのだから、今年も例年になくひどかった。それでもある一時期、やや快方に向かっていた日、すすきの向こうに夕陽を見た時はこれで今年も秋を受容できたなといった思いになった。

早朝、家人にせかさねながら身支度を整え駅裏の集合場所に急ぐ。バスの群のなかにそれらしい人影を見つけて近づくと、なんと私が一番遅かったという。この時やや快方に向かっていたはずのうつつ状態は、無残にももとの深みに落ちていったのである。

小さくなって席に座っているとバスは動きはじめた。恒例のセレモニ

ーが始まり、いよいよ本日の講師篠原氏の登場である。

篠原氏の話の聞いてみると、まるでこれから冒険に出発する少年のようであり、カバンからドラエモンのごとく「古墳めぐりセット」を取り出す姿は、少年の輝きに満ちていた。となりを見ると憔悴しきった網本氏の顔があった。「朝がつらくて・・・」この白い顔をした細身の秀才青年の持病を知ってしまったが、私はうつつ状態である。偉そうないえない。

息で曇った窓ガラスを拭くと、人家は少なくなり山並みが迫っていた。空は相変わらず低く重かった。山あいをぬけ、峠をこえると庄原の町である。

「伝神福寺跡」に降り立つと雨に出会った。八幡宮の境内に礎石が数個無造作に転がっている。雨はやまなかった。

「瓢山古墳」は雨の中だった。久しぶりに訪れたが、以前と全くと言っていいほど変わっていなかったのはうれしかった。十数年以上も前、古墳の勉強を始めた頃ここを訪れて、これぞ前方後円墳と感動したものである。

「亀井尻窯跡」は民家の背後に隠れるように在った。久しい前から訪

ねたいと思っただけにありがたい寄り道であった。

昼食はバスの中だった。久しくこんな目に遭ってなかったので雨男の存在が非常に気になったのもこの時である。

午後最初に目指したのは「旧寺古墳群」。見たい、見てみたいと念願してやまなかった古墳群を目の前にしたときの興奮は並でなかった。急な坂道も何のそのである。篠原氏は相変わらず立て板に水でマイクをにぎっている。網本氏はいえ、ゴソゴソと歩き回っていたかと思えば、今度はシズシズとうろついている。

私はといえば、暫しうつつ状態を忘れてはしゃぎ回っていたのであった。その時突然、うろついていたはずの網本氏が「瓢山古墳はどこになるのですか」と尋ねてきた。「ちょうどこの方向です。テレビの中継塔が見えるでしょう」さすが白くて細身だが秀才青年、見るべきところはちゃんと見ている。

七森氏の心配をよそにちゃんとイレ休憩をすませて次なる「唐櫃古墳（旧：明賀古墳）」をめざす。現在発掘調査中とのことである。「篠原古墳めぐりバック」の良いところは、このように発掘調査中でも堂々と調査区域に足を踏み入れることが

できる点にある。それにしても備北の古墳は墳丘の保存状態が備南にくらべ格段によいのはなぜなのだろう。・・・と思いつながら、またもやはしやぎまわっている自分がいた。網本氏も相変わらずシズシズとうろついているし、篠原氏はあっちへ行ったりこっちに來たり忙しい見学であった。

最後の古墳見学は「鍛寄古墳」である。バスから降りて歩いていると、篠原氏が「古墳がどこにあるか探してみ、見つけたら大きな手で手を上げるんだ」と茶目っ気をだした。数人が走り出したが、田口氏に先を越されてしまった。谷に向かって石室が大きく口をあけている。説明の後、式内社「蘇羅比古神社」に参拝して古墳めぐりを終える。

バスに乗り込むと篠原氏は「ひゃあ、一人で全部すると疲れるのー」と言ったが、言葉とはうらはらにその顔は喜色に満ちていた。

庄原を後にするにつれて私はまたうつ状態に逆行していった。となりを見れば、再び憔悴した網本氏の顔があった。バスの中の賑わいをよそに二人は隅っこでボソボソと暗い会話をした。「運動不足でねえ・・・」。「最初からきついと長続きしませんから散歩程度から始めてはどうです?」と答えたような気がする。

その後私の鬱は快方に向かい、笠岡市内で網本氏夫妻が歩いているのに出会った。網本氏はあの憔悴した顔とは変わり生気に満ちていた。まさか私の進言を忠実に実行したとは考えられない。ではいったい・・・いまもって謎である。

最後に何故あんなに庄原に前方後円墳が多いのか?と言う質問を受けたが答えはウフ、ヒ・ミ・ツ。あれこれ推理して答えがわかれば古墳研究部会までお知らせ下さい。必ず古墳研究部会より勧誘員が参上致します。

赤坂町探訪の記

出内 博都

平成五年十二月の月例行事として同月五日、赤坂町の探訪を行った。現地集合方式であったのと、地元に参加者が多かったので、九十余名という盛況であった。

赤坂は古代赤坂郷の中心で、長者伝説と明子妃の伝承をもち、中世は昭慶門院領の津本郷の一角をなす古い土地柄である。

赤坂という地名は、花崗岩地帯として石切場の多い地域の景観的地名と思われる。有史以前は、本土と沼限半島の間の地溝帯で、地質学的にもそれを偲ばすものが多い。

見学、探訪の場所や文化財は左記の通りである。

①古墳出土内行花文鏡(福山市重文)、太田古墳(草戸地区)出土。現在古墳はないが、五世紀前半頃のものと思われる。花文が六弁になっているので仿製鏡である。勾玉、管玉、裏玉など古墳時代中期前半の古墳からの出土品が保存されていることは貴重といえよう(藤原肇氏所蔵)。

②川上城趾

長者伝説をもつ新庄太郎実秀の末葉という伝承のある村上加賀守英成の居城と伝える。山下に土居、兵田の場、道土(道城)などの地名をもつ城郭地帯である。

十二月二十三日に地元の協力をえて実測調査を行った。北東から西南に長い数段の郭をもつ城跡であるが、崩壊が進んで段差は必ずしも明確でないが、長さ一〇m、幅一〇m余の郭のうちで、本丸部分の、五mの土塁の跡、西南と北東の二ヶ所の堀切、三つの虎口が喰い違い虎口になっていることなど、いくつかの見るべきものがある山城である。南の丘の上に出丸があると思えるが、調査できなかった。

③勝負銅山

赤坂長者伝説のもと採銅長者から出たものと思われる位、銅にまつ

わる遺跡伝承が多いなかで、この銅山は四十数年前まで採鉱された銅山で、今でもたたくさんの「まぶ」跡が確認できる。廃坑後四十数年たった今も、廢土の山に草木が生えていない現状をみて、いかに鉱害が大きいかということを知らされる。

「しょうぶ」という地名は水源とか小溪流など、水に関連する地名であるが、ここから流れ出る小川や池に、小魚や生物が棲まなかったという伝承も現実味をもって迫ってくる。また、下流に「大目」という地名があるが、これは後世に貢納負担を少し大目にみてやるといふ故事からきているという伝承があるのもうなづける気がする。

④赤坂八幡神社と宝篋印塔

創始は九世紀前半の貞観年代と伝えられ、建久二年(一一九一年、瀬戸町福成寺記録)と天正八年(一五八〇年、伝来の棟札)の再建伝承がある。殊に天正年間のものには神辺城主杉原盛重や、遷宮式に妙王院有崇上人の名を伝え、格式の高さを誇っている。また、赤坂、草戸、加屋、津之郷の総鎮守とも伝えられている。

宝篋印塔は当社の東方の丘上にあり、花崗岩製で、高さ二・三五m、基底一辺一・五mの堂々たるもので、基礎、塔身、笠、相輪の揃った立派

なものである。笠の隅飾りがやや外に開いているので、南北朝頃のものではないかと伝えられている。

また、西方の氏家有木家の裏庭の奥に残る古墳の石室の奥の鏡岩は横穴式石室のもので、かなり大きな石室をもった古墳のあった事を物語っている。

⑤赤坂の石の曼茶羅

曼茶羅は梵名の「マンドーラ」の音訳だが「本質を成就するもの」という意味である。曼茶羅の図式はその本質を表現しており、同時に戒壇、道場などを表している。密教における胎藏、金剛、兩界などの曼茶羅が有名である。

曼茶羅のある処が霊場となり、ここで祈禱をして御利益を得る。ここでは高さ二・二七m、横四mの大岩面に直径一・三mの円形を彫り、密教の金剛界曼茶羅五仏を配し、更に横に並べて縦一・六六m、横五・一cmの画の中に願文を記している。

「千時貞享乙丑天三月吉辰日 福山常法義龍阿闍梨造文」の銘文から貞享二年（一六八五）の造立を知ることができる。これについて『備陽六郡志』では「福山浜の町木屋孫右衛門」が施主と伝えている。貞享二年という水野四代勝種の時代である。

⑥石切場

赤坂という地名が花崗岩地帯のもつ外観の地名で、花崗岩の産地であったことはつとに知られている。戦前まで石と畳表の積み出しの為に、赤坂駅に貨車の引き込み線のあったことは多くの人の記憶に新しい処である。この名残は現在もあって、石切場という採石場が続いている。

長年、石と暮らし、石と語りあった職人さんには、いわゆる石の目が見えるのか、驚く程大きい岩塊に列に「たがね」を打ちこみ、それを軽くたたくことによつて石は生きもこのように割れ目をあらわし、きれいに割れていく様は、まさに名人芸という他に言いようもない。

先祖の残した歴史の息吹が、こうして現代の工業化社会の中で静かに生き続けていることに感動を覚えた一コマであった。

⑦すべり古墳

「古墳探訪」(備陽史探訪の会発行)にあるので省略する。

(参考)

赤坂における秀吉、義昭の対面

元龜四年（一五七三）七月、流浪の將軍となった足利義昭は、紀伊を経て天正四年（一五七六）朝に到着し、毛利氏の庇護のもとに日をおく

る事になった。その間、先の將軍としての権威は、田舎の大小名に對してはかなりの効果があったらしく、あれこれ對信長戦略を練つたが、結局信長の死後、秀吉の天下になって天下への野心をすて、將軍としての矜持を捨て、かつての宿敵信長の武将だった秀吉の前に頭を下げる事になった。それが天正十五年（一五八七）三月の秀吉、義昭の赤坂対面である。

この事について『沼隈郡誌』には、朝鮮の役の時（天正十九年）九州下向途中の秀吉は、津之郷の田辺寺によつて義昭と対面し、太刀一口を進ぜるとしているが、これは明らかにまちがいである。朝鮮の役の時に義昭は、足利昌山として名護屋城留守居役を命ぜられている。秀吉、義昭の対面は「九州御動座記」によれば、天正十五年三月十二日のことである。

九州御動座記

大坂より

(天正十五年)

三月朔日、九州表へ御動座道之次第

三月朔日 舟付

一津國兵庫迄 十里

二日 舟付

一播磨明石迄 五里

三日、(略) 舟付へ一里

一同國姫地迄 九里

四日 一同國あかふ郡迄 七里

五日 一備前片上迄 六里 舟入

一同國岡山迄 八里

但此所に中四日御休息也、

十一日 一備中なか山迄 八里

(十二日着)

一備後赤坂迄 八里

但此所へ公方様(足利義昭)御出にて、御太刀折にて御禮を被仰候、御酒上に互に銘作の御腰物被為參候、則公方様御座所も赤坂之近所也、備後のとも(一)の浦へ三里在之、

右の資料にある如く、大坂よりの各地は只地名と里数のみの簡単な記録なのに、赤坂については、義昭が宿舎(津之郷)から赤坂に至り文書で礼を述べ、酒宴を催し、更に名刀の交換をなすという具体的な記録がある。その場所がどこであるか伝承が失われた為に前記の『郡誌』のような記事になったのではないだろうか。

徳川氏の天下になり、豊臣ゆかりの史跡が変造されたり、消滅したのは多いと思うが、これも一つの例であろう。秀吉の赤坂滞在について毛利氏は

気をつかい、赤坂になった事でかなりあわてている様が、関閼録などに見えている。天正十四年(一五八六)十二月の輝元の書状には次のようにある。

関白様御下ならハ神邊にて御宿調候事、其外御座所なにてのあてかひ彼是可入候条、細口(衆?)ニ可申付候 謹言

極月十九日 てる元御判

二太

これによれば、宿舍の整った神辺あたりに宿所を考えていたようであるが、御動座記にみる如く、殆ど六ノ八里という行程表からは神辺はあまりに近く、判で押した様に八里をとって赤坂になったのではないかと思える。

二太は近従の二宮就辰の事で、細衆は伝令の事であろう。結局、宿所は赤坂ということになり、急拠天正十五年正月二日に赤坂の宿所造営について動員を指示している。

関白様 御座所 赤坂

一、御宿いへそのほか普請領村別紙に在之

一、百貫之地ニつき夫拾人あての事

一、番匠・鍛冶そのほか諸細工人、

領内ニあり次第ニきり用へき事
一、竹木ハ寺社又ハ人の土居まはり、用次第ニきり用へき事

一、なわ、かつら郡役たるへし
一、たゞみのいゝとも同前
一、すみ・たき木同前

右法度として相さたむ所也、然を領主としていろこひさまたけは、届に及ハす領地押へをき、用所相調之若又、地下人と相むかハ、掟の旨にまかせ、はた物ニかけ堅固可申付者也、仍下知如件

正月二日

桂左衛門大夫(就宣)殿

小方兵部丞(元信)殿

佐々部又右衛門尉殿

右の資料によれば、緊急の大事業として百貫之地で十人ずつの人夫と、大工など職人の動員、竹木、なわ、かずら、たゞみ表、炭、薪など人と物についての総動員をかけ、これに叛くものはきびしく処分することを奉行に申しつけている。

どれだけのものを、どこに作ったか、今となっては知る由もないが、街道村赤坂にとつては有史以来の出来事だつたと思える。更に「秋藩賦録」によれば、翌正月三日近習の二宮就辰に対して、次のような書状を出している。

(沼隈郡)中山赤坂御宿入目之儀、以注文申候條、其上宿かへの奉行共ニ奉書遣之候、其旨ニ引合候て可相

調候、米方心持是又兩人所より内意可申遣候条、其調肝要候く、かしく、
正月三日 てる元御判

二太右

宿所のしつらえは奉行に命じた通りであるが、おもてなしの入目の儀について特に近習に指示したもので、二重三重に念をいれている様がよくわかる。

この文書で重要なことは「沼隈郡中山赤坂」の語句である。赤坂のどのあたりに宿所をおいたかの謎がこの中山赤坂にあるのではなからうか。

中山というのは各地にあるが、多くの場合村境、郡境などにある場合が多い。赤坂の古い地形を考えると、済美中学からイコーカ山古墳に連なる尾根が、JRと国道によつて削平されているが、このあたりに中山(峠)を考える事ができるのではないだろうか。古地図によれば、この尾根の西側、赤坂駅付近に古い寺のあった事が知れる。こうしてみると中山赤坂は、加屋、山北方面からの入口付近にあつたのではなからうか。

秀吉と義昭の会見、然もその時秀吉が義昭に対して伊予の国で一万石を与える契機となつた会見の場所が、何の痕跡も残さないということに歴史の現実のきびしさを感じさせる。

常城、茨城雑考

七森 義人

二月六日に鬼ノ城例会を担当することもあるので、備後の古代山城・常城、茨城(うまらき)について、少々書いてみたい。

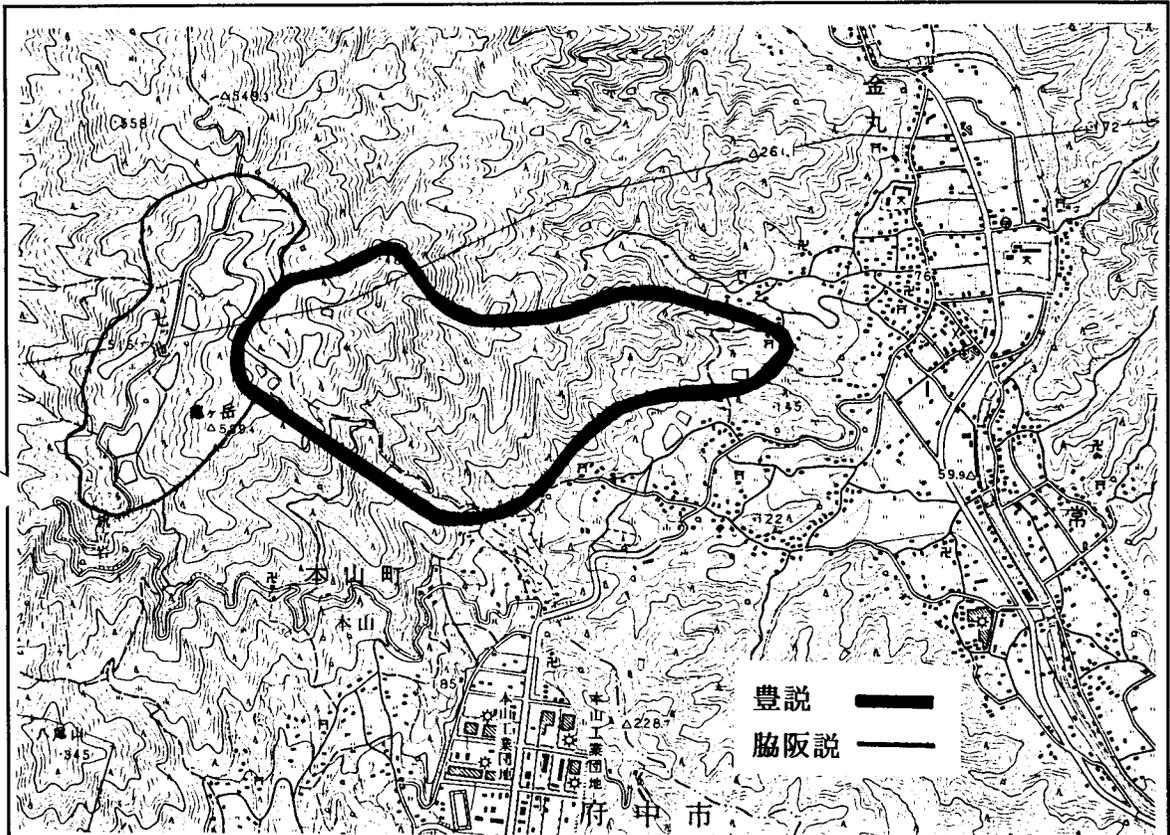
まず、常城の比定地についてだが、脇阪光彦氏(広島県埋蔵文化財センター)の学説ではほぼ確定と思われる。しかし、茨城についてはまだ不確定である。

常城の比定地説を最初に提起したのは、豊元国氏(故人、元府中高校教諭)であつた。氏は「府高学報」に掲載された論文「奈良時代の山城の研究」の中で、府中市本山町の亀ヶ岳の山頂付近から、東の尾根へ下つて新市町の常までの一帯を常城の城域とした(図参照)。

これに対し、脇阪氏は「芸備地方史研究」で亀ヶ岳の山頂の尾根から西尾根(七ツ池)を取り囲む地域を常城とする説を提唱した。先に記したように、現在は脇阪氏の学説が有力視されていれが、決めてとなる遺構は見えていない。

次に茨城については、豊氏が前記の論文の中で、福山市の蔵王山説を掲げ、山麓を城壁としている。

次いで、福山市の蔵王山説を掲げ、山麓を城壁としている。



これに対して高垣不敏氏（故人、元神辺在住の郷土史家）は「備後国府考」の中で、深安郡神辺町湯田の山王山から茶白山（五ヶ手島）の一带をその比定地としている。

また、古代の郷に抜原郷があり、この地を茨城とする学説もある。そして、この抜原を加茂町北山とする説、岡山県井原とする説、神辺町川北・川南とする説、神辺町湯田とする説などがある。

さらに最近になって、広島市在住の郷土史家・川上雅治氏が「古代困難時代の瀬戸内水軍史」の中で、あらためて蔵王山説を提出しており、まさに諸説紛紛、百花撩乱といったところである。

さて、ここで原点にかえり、古代山城について簡単に復習をしておく。古代山城は、朝鮮式山城と神籠石式山城に大別できる。しかし、これ以外にも文献には「戌」「関」「烽」「軍団」などの語句が登場し、広い意味での山城に入るかと思われる。

また、古代東北の国府とされる多賀城、桃生城、秋田城等は小丘陵上にあり、防御的な役割が極めて強いことから類推して、西日本の国府も同様に防御的な役割を持っていたと考えるのは大胆過ぎるだろうか。

中央政権の拠点としてあったわけだから、防御機能を持っていた可能性がある。他にも「記紀」には「要害」「塞」等の語句がみえ、これらも城の一種であろうか。

さて、朝鮮式山城とは文献（六国史）に現れる古代山城のことであるが、朝鮮半島に築かれた山城と酷似しているため、このように呼ばれている。

またこの山城は、六六二年の白村江の戦で日本軍が新羅・唐連合軍に破れた後、新羅からの侵攻に備えるため、百済からの亡命将軍が指揮して築いたとされている。

その構造は、石塁と土塁が山頂を一巡しており、この内部に武器庫や食糧庫があったという。

次に、神籠石式山城とは文献に記録が残っていない山城のことを指す。この種の山城が最初に確認されたのは、福岡県久留米市の高良山である。1m内外の切石が一行だけ、山の尾根を取り囲むように並んでいる。これは、ふつうの石垣と比べて防御的要素が少ないようにみえる。さらに、その石列の内部に神社の社殿があったため当初は祭祀施設と考えられ、この石列を含めた建造物を神籠石と呼ぶようになったのである。

後に、この高良山神籠石と似た建造物を神籠石式山城というようになった。しかし現在では、構造上は朝

鮮式山城に似ていても、文献に記録がないものはすべて神籠石式山城と呼んでいる。

二系統の山城はともに西日本、なかでも北九州、瀬戸内、近畿だけではなく確認されていない。瀬戸内では山陽道、瀬戸内航路沿い、国府の近辺、もしくは古代遺跡の密集地に集中して築造されている。

これらに関係深い施設「烽」は、城内の発掘調査が進んでいないためか、遺構が発見されていない。烽は、東北の秋田城、出雲風土記に記されている畷垣烽、武布志烽等で確認されているだけである。

これに関する論考としては、宮崎忠平氏の「日隈山の烽」(佐賀県の烽を扱う)と、豊氏の、瀬戸内に多い竜王山と地名からみた論文がある。

ところで、近年、弥生時代の高地性集落が見張りの役割をもっていたことが明らかになってきている。当然、烽の存在が推測できるわけだが、烽の遺構跡とされる明確な焼土層が確認されているものはあまりない。今後の調査が待たれるところである。話を備後の常城、茨城に戻す。

この両城が最後に文献に現れるのは「続日本紀」養老三年(七一九)の条で、「備後国安那郡茨城盧田郡常城停(備後国安那郡茨城、盧田郡

常城を停む)」とある。

この記事で常城と茨城の活動が停止したことがわかるが、その後再開したという記事は載っていない。

養老三年という時代は、常城、茨城が築かれた時代から約三〇年経過している。他の古代山城の記録も、この記事のさらに三〇年後、怡土城を築くという記述まで出てこない。

つまり、七世紀後半のような政治的・対外的な危機が去ったため、山城を築く必要があまりなくなっただけのことであり、そうした流れの中での常城と茨城の機能の停止ということであろう。

それにしても、何とかわれわれの手で茨城を発見したいものである。

昭和という時代歴史観

柿本 光明

この一秒、この一秒が歴史につながっている私たちの物語りである。歴史は終りのないロマンである。

謎があり、夢がある。喜びがあり、愛がある。哀しみがああり、怒りがあり、人が生きた証がある。そこに人は、限らない魅力を感じる。ある日、土の中から銅鐸が発見され、歴史が新しい顔を見せると、また新しい物語が生まれる。

事実にせまりながら 一〇〇多事に近づくことが出来ない過去。それが歴史というものである。

日本の歴史上、「昭和」という時代ほど激しく揺れ動いたおもしろい時代はない、と将来いわれるようになるであろう。

源平合戦の時代も日本の動乱の時代であり、戦国時代も激動の時代であったにちがいない。だが、それはたかだか、日本という島国の一国の内乱であり、いわばコップの中の嵐にすぎなかった。

また、明治維新は、欧米列強の外圧など、国際的影響によって引き起こされた動乱であったが、武士階級を主とした内戦として戦われて、国民全部をその渦に引き込むまでに至らなかった。

それに比べれば昭和の動乱のスケールは大きい。社会変動の点でも、昭和のはじめと昭和60年代とを比べれば、国民生活の様相を根こそぎ変えてしまったほどのめざましさを示す。社会変動の点でも、昭和のはじめと昭和60年間の前半20年は、第一次山東出兵から太平洋戦争の敗戦に至るまで、戦争に次ぐ戦争であり、国民全部がその渦にまきこまれ、あるいは戦火に終われ、傷つきたおれ、惨澹たる体験を持った。その間に日

本にいた者で、この戦争という魔物に自分の運命を左右されなかった人はいなかったといえよう。

全国民をまきこんだ「総力戦」に大なり小なり翻弄され、それぞれ消したい痛苦の記憶を刻まれたにちがいない。

日本の男子の多くは兵士となって大陸に出て行って、平和だったアジアの民衆の生活を破壊し、多くの民間人を殺傷した。その日本国民もまた戦場や本土空襲や逃走中の飢餓などで三〇〇万人からの人命を落としたのである。

こうした犠牲者を出した家族はどんな暗い思いをもって、その後の人生を歩んだであろうか。日本はこの20年間に世界三大強国の一つから惨めな敗戦国、米軍支配下の四等国に転落したのである。

この長くつづいた戦時下の生活で、文句なく最も苦労したのは一般の婦人たちであったであろう。戦前の日本の婦人は多くの点で公民権が奪われており、ひどい男女差別のもとに抑圧されていたばかりでなく、戦争による耐乏生活の重圧を一身に負わされていたからである。

戦後の40年は廢墟の「日本零年」からの立ち直りであり、復興であり、そして、先進国日本、経済大国日本

をめぐしての超スピードの駆け足であつた。この40余年をつらぬいた指導原理は、急速な「近代化」というひとことに尽きるところ。

歴史はその時代に生きた人間の肉体に最も端的に刻まれる。昭和15、16年頃の村には、どの集落にも二、三人は90度に腰の曲がった老婆の姿がみられた。しかも50代、60代でそういう悲惨な姿をしていた人がいたのである。それがどうであろうか。いまでは50代、60代は壮年である。昭和10年ごろの日本の婦人の平均身長は一四八センチしかなかった。いまの女子中学生以下である。平均寿命も昭和10年、男で四十四・八歳、女はそれを少し上回るにすぎなかった。

昭和のはじめ「人生50年」といわれ、戦争末期、特攻隊の出撃が始まった頃には「人生25年」と呼ばれたものが、いまでは「人生80年」。この半世紀の間に日本人の身長は平均十五センチ以上も伸び、とくに戦後生まれの子供たちは栄養豊かにすくすくと育つたのである。

かつてのアジア最強の軍事大国が、いったんは焼け跡の廃墟と飢餓のどん底に落ち、そしてそのあと、急角度に世界有数の経済大国に上昇するというこの深いV字型の歴史は、そ

のまま昭和の激動の凄まじさを物語っている。戦前の農村にみられた恒常的な飢えや苛酷な手労働や娘身売りや^{せむし}檻棲の惨めな生活風景は、いまではどこにもほとんどみることができない。そして、70歳代、80歳代を迎えた老人たちは、この激しい戦争と復興の歴史をよく耐えたのである。だからそうした人達のつづる「自分史」は、そのまま貴重な昭和史の証言としての価値をもつ。願わくば後世のために、この激動の時代の得がたい体験を、記録として書き残していただきたいものである。

いまの若者は、戦争のつらさをほとんど知らない。沖繩の人々を除けば、太平洋戦争は彼等にとつては教室で聞く日露戦争の物語となら変わらない。かつて地獄相を呈したサイパン島の海辺で、新婚旅行のハネムーンを楽しんでる数百、数千組のカップルの姿態を見ていると、私たちはなんのために戦い、「玉碎」した人たちはなんのための犠牲であったのか、目まいのするような感覚を味うことがある。はたして、昭和は一つの時代といえるのか、いや異質な二つの時代の継ぎ合わせではないのか。世代間の深い断絶をなんとかして埋めるためにも、私たちはこの時代の歴

史を一つのものとして学ぶ意味をかみしめるのである。

今思つてつづる

多田 純朗

まだまだと思つている間に、何時しか還暦を過ぎてしまった。亡父が丁度この年頃であつたらうか、古のことをよく話しかけていた。一親父、いま亡くなるわけでもないのに、と当時は若気の至り、本気で聴く耳をもたなかつた。ただ、晩年に「人生は儚^{はかない}ぞ」と言つてくれたことだけは、はつきり脳裏に残っている。

近年、私たちの先人が長年に亘つて築き守つて来た農村の自然や文化が、社会の変化とそれに伴う価値観の変化により急速に失われてきている。

そんなことを考えていた矢先、神社の会合で、地区内の小社が八幡神社へ合祀されているが、遷座前の故地が分からないものがあり、激変している現代のこと、今こそ明確に伝承する手立てを講じておかないと、永遠に失われてしまうのではなからうかと話題になり、いきおい私がその任を担うことになった。

明治政府は三十九年内務省通牒に

よつて、半ば強制的に神社合併を推進めたようであるが、『芦品郡志』によると、芦品郡桑木村では明治四十二年五月、荒神社等十社を八幡神社へ合祀している。

今と異なり信仰心の厚かつた当時のことであり、祖先以来崇敬して来た荒神社などを送り出す氏子たちの心情は、どんなものであつたらうか。私の組では明治初年頃、十四戸で荒神社を祀つていたらしいが、何時も通りすがりに拝み親しんでいた荒神様が合祀によつて遠くになり、さすが空虚に耐えかねてか、昭和十五年ごろ故地へ分祀を設け、以後神職を招いて年一回お祭りが開かれるようになり、幼き日の楽しかつた思い出と共に現在も続いている。

さて、合祀された小社は大体特定できるところまで辿り着いたが、次の難問は、観音堂へ合祀された地藏堂・薬師堂等がある。中には『備陽六郡志』の記録に「破損仕候」というものもあり、ご本尊はどれやら等々。また、合祀されたはずの地藏堂跡に現在も堂々とした地藏尊立像があり、それらの解明に難渋している。こうした昔の事柄を生前に父が話しかけてくれたものだったが、今にして後悔するも後の祭り。このさき温故知新を志し、地区内の故事

について遅々としてではあるが、歩み続けてみたいと思う。

神社アラカルト

松岡 正

私は図書館から借りてきた本を斜め読みして楽しんでる。

『新日本史への旅』（森浩一著）

は写真入りでわかりいい。福山市蔵王の宮の前廃寺跡も、出土品の文字瓦も紹介されているのがうれしい。

この本で特に私が興味を持ったのは、宮崎県南郷村の御門神社である。祭神は百済の禰嘉王で、王は奈良時代、難をのがれてこの地へ来て、新しい農耕や医術を農民に教えた。農民がそれを感謝して祭ったらしい。

その墓というクドまんじゅうクド神社の写真やら、押し入れの上段に無造作につつまれて三十本位の古剣と、銅鏡十数本の写真がのっている。著者はそれ以上の説明をしていない。難しい説明を聞かされると本を閉じたくなる。これで著者はこの項を終っているが、新聞（天声人語）がまたこの神社を紹介している。

御門神社の三十三面の銅鏡の一つは正倉院所蔵の銅鏡と同じだということ、今でも県内の木城町の比木

神社に祭られた王子が、父王の祭られていた御門神社を訪れ、年一回の再会をはたすという「師走まつり」が毎年催される。またご神体は一昨年、千三百年ぶりに百済の古都・扶余へ里帰りし、扶余の名士に迎えられたと伝えている。

古代の日本と韓国の交流がしのばれて興味深く感じた。

ところで、念のため祭神を「神社総覧」（新人物往来社刊）で見ると、御門神社はイザナギの尊であり、比木神社はオオナムチの命になっている。何故であろうか。私はこう考えている。

江戸幕府下の検地帳や社寺明細帳から、近くは明治元年の神仏分離令によって行われたであろう祭神の戸籍調べをくぐり抜けるため、古事記や日本書紀に登場している神々に代わってもらったのではないかと。

古代をしのぶと、その頃の人は、「近くの山々に神がやどる」とそばくに考えたと思う。そして、山頂に小さなクドはこらクドを作って拜んだ。そのとき名前が必要になってくる。このとき、山の神の名前として使われたのが記紀の神々ではなかったか。

富士山の浅間神社はコノハナサクヤ姫の命、長野県御嶽神社のクニト

コタチの尊、石川県の白山比咩神社の菊理媛などである。

菊理媛はなじみない名前だが、古事記や日本書紀の本文には登場せず、日本書紀の一書に登場する。この姫はイザナギが亡き妻イザナミをもとめて黄泉の国に行き、そこで夫婦げんかしたとき、イザナギの耳もとで何かをささやいたという。しかし、菊理媛は何をささやいたかのか紀は全く伝えていない。そこである学者はクミそぎクミそぎをいと言ったのではないかと推理している。イザナギはその後、日向の阿波岐原へ行つてみそぎを行い、天照大御神を生じさせた。そうすると菊理媛は皇祖神誕生の大恩人と言わねばなるまい。尊称のない姫が神様になっても不思議ではない。

福山に蔵王と呼ばれる山がある。山形県に蔵王スキー場がある。くわしく調べていないが、全国には同名の山がまだまだあるのではなからうか。蔵王の本家は南北朝時代、後醍醐天皇がこもられた吉野山の金峯山寺（蔵王堂）だという。

楠正成の子、正行が行在所にめされ、後村上天皇から、再度、足利勢と戦うように命ぜられる。正行は如意輪堂の板壁に「辺へらじと兼てお

もへば梓弓 なき数に在る名をぞとどめる」と書きつけ、足利勢と戦って死んでいった。これは戦前の小学校の教科書に出てくる話である。

話が思わず脱線したが、つまり蔵王とは、熊野山地で行をする山岳信仰の修験道の行者が全国を巡ってこもった所だろう。これは蔵王観現と呼ばれる独自の神格であって、その前身の開祖は役の小角であり、仏法に近い。

その外、秋葉さん（静岡県天竜市の北方にある秋葉山の秋葉神社）は、防火の神（祭神がカゲツチの神）として全国に親しまれ、祭られている。

全国的に数の多さを競うのはお稲荷さんと八幡さんだろう。八幡宮は、宇佐神宮と京都の石清水八幡宮、福岡の宮崎宮、鎌倉の鶴岡八幡宮の系列に分けられるようだ。

大阪府池田の北にある多田の地に多田満仲の多田源氏がいた。この多田源氏から枝分かれして河内内の石川に住む石川源氏ができる。石川は応神天皇（菅田別尊）陵の近くの土地を開墾するが、都の守護神である石清水八幡宮に土地を寄進して、その地を預る荘司になった。このとき本所の石清水八幡宮から勧請して作られたのが菅田八幡宮である。神社

はあたたかも応神陵を拜するように並

んで作られている。こうして、源氏は八幡宮と縁を結んだ。この石川源氏と言うのが河内源氏のことであり、その子孫が源氏の棟梁になっていく。NHKの大河ドラマの「炎立つ」である。宇佐神宮の直系のひとつに、御調八幡宮（三原市）があることはご承知の通りである。

お稲荷さんには神社系と仏教系がある。福山の草戸の稲荷さん（ウガの尊）は神社系であり、岡山県の上稲荷は仏教系である。

最後に全国の神社の一覧表を持っていらっしやる方に。その祭神を眺めて、記紀のあの辺にあったなあと、すぐ連想される人は記紀の神話編は卒業された方だと思う。ご自分でテストしてみても如何でしょう。

(参考)

○明治三十九年、政府は神社の合併を奨励する。

○明治四十一年、福山地方でも合併（寄せ宮）が行われる。

私はこの「寄せ宮」の典型例として、万能倉八幡神社（自彊高校前に興味をもっている。この神社のことについてお知りの方はご一報下さい（福山市御幸町森脇三六一―一〇五五―二二四〇）。

和歌

赤松 雅子

大朝吉川氏探訪

山路来て古城の跡に萩の花
散り惜しみつつ人を待つかな

忠犬が殿の首持ち走る夜や

哀れ松風うらみは遠し

里神楽ころげ落ちても笑あり

すばやくのぼり又拍手あり

水牢跡恐る恐るのぞき見る

暗き畦道沃しい彼岸花

堂々の戦国の石垣残り居り

すすぎが原に往時の威勢

平成五年十月十・十一日

庄原古墳めぐり

庄原の樹齡重ねし大杉の

なおたくましき頂を見上ぐ

時雨るるも機落葉を踏みしめて

古墳の丘へ心はづめる

秋寒の空に明るく鈴成りの

赤き柿の実霧の山路に

平成五年十一月二十一日

檜原から伊勢まで

平田 恵彦

昨年の十月二日に神宮の第六一回式年遷宮が挙行された。滅多に見ら

れるものではないので、夏前から計画を立て、出かけることにしていた。神宮は、天照大神を主祭神とする内宮と豊受大神を主祭神とする外宮、およびこの両宮に所属する別宮、摂社、末社、所管社あわせて一二五社、その祭神一四一座から成り立っている。祭祀は古代から連続と続いているが、当初から伊勢で行われていたわけではない。

天照大神は皇祖神として、倭大國魂とともに宮中（大殿）に祭られていたが、たがいに神の勢いを畏れ、共に住むには不安があった。そこで、天照大神を豊鍬入姫命に託し、大和の笠縫邑に祀ったと「日本書紀」崇神天皇の条にある。

「倭姫命世記」によれば、その後、三三年たつて但波国吉佐宮へ、さらに倭国伊豆加志本宮、木国奈久佐浜宮等を転々とし、ようやく五十鈴川上宮（内宮）にたどり着く。笠縫邑から数えて実に二六カ所目である。笠縫邑の所在地は、大神神社の摂社の檜原神社が有力視されている。

今回の旅行では、この檜原神社から伊勢への道を辿ってみようと思った。

十月一日の夜、クルマで福山を発ち、二日の早朝四時に大神神社に着いて、駐車場まで仮眠し、七時前に起きて着墓まで行き、三輪山の日の出

を撮影した。

その後、国津神社を経て三輪山麓まではしり、そこから檜原神社まで歩く。坂道を少し登ってふと振り返ると、大和の国中が眼下に広がっている。圧倒的な光景だ。左から天香久山、畝傍山、耳成山が並び、ほぼ正面に箸墓、その彼方には二上山が見える。これこそ大和だ。「国の初めは大和なり」そんな言葉が自然と浮かんできた。

私はしばらく動けないでいた。檜原神社のすぐ前を山辺の道が通っている。石畳のほんの小さな道だが、歴史の重みを感じさせてくれる。境内は決して広くないが、清浄な空気に包まれている。正面に独特の三輪鳥居だけがあって、神殿はない。鳥居を通して天照大神、伊弉諾尊、伊弉冉尊の三座が鎮座する、神体山三輪山を直接仰ぐのである。

七時をわずかに回ったばかりであるのに、神職がいらしたのには驚いた。記帳を見ると、既に何人かが参拝を済ませていたのにはさらに驚いた。神職のお話によれば、多くの人が早朝に写真を撮りに来るという。私も早速撮影させていただいた。

境内からは畑越しに二上山が正面に見える。ここからの夕日はどれほど美しいだろう、そう思いながら神

社をあとにした。

この後、多武峰・談山神社（藤原鎌足を祀る）を訪ねた。少し戻って榛原町を抜け、室生村、曾爾村、御杖村と旧伊勢街道をはしり、県境を越えて三重県美杉村に入った。

美杉村には、伊勢国司・北畠氏の居館跡と有名な庭園があるが、今もともに北畠神社の境内となっている。

北畠氏は具平親王を祖とする村上源氏の一系統で、代々公卿となって天皇の側近にあった。南北朝時代にいたり、有名な北畠親房の子・顕能が、東奔西走する父や兄・顕家に代わって伊勢国司に任じられ、この地に霧山城を築き、足利氏に対抗した。

顕能の一生は戦いの連続であった。なかでも高師直の従兄弟・高師秋を生け捕りにし、処刑したのは特筆すべきことである。形を変えてではあるが、師直と戦い討ち死にした顕家の仇討ちを果たしたのである。

だが、この名族も一五七六年（天正四）信長の謀略によって滅ぼされ、二四〇年にわたる歴史に幕を閉じた。午後になって松阪に着いた。神宮は遺座のため既に参拝禁止になっていたので、多気郡明和町にある「県立斎宮歴史博物館」を訪ねることにした。斎宮とは神宮に仕えた斎王の宮殿と、その役所である斎宮寮の総

称である。

博物館の建物は広島県立歴史博物館と同程度だが、敷地ははるかに大きい。まだ未整備のところも多く、これから公園化が進むのだろう。展示はうまく整理されていてとても見やすい。驚いたことに、斎王の儀式を説明するのにホログラフ（立体映像）が使われていた。別室のステレオ音響・マルチスクリーンでの映写も含め、これからの博物館の一つのあり方を示しているように思えた。

その後、橿田川沿いにある神服機織殿神社と神麻統機織殿神社を訪ねると、ちょうど神職が機を織っていた。この二社は大神のために絹と麻の神御衣を織る、つまり大神のためだけの神社である。したがって氏子は一人もいない。

神宮には真夜中近くに行った。遷座は既に終了しているが、翌朝五時まで参拝は許されない。駐車場には報道関係者のクルマしかなく、一般では一番乗りだったと思う。その後、続々とクルマが詰めかけ、夜明け頃にはいっぱいになった。仮眠の後、大鳥居の前に並んだが、前から三十番目くらいだった。後ろには何千人いたのだろうか。真つ暗な中で報道陣のビデオが回る。その照明とカメラのストロボとが眩しかった。

五時になった。

暗闇の中、一斉に我先に神殿へと走り出す。中には口を濯がない人もいる。何かしら悲しい気分になった。神殿の前は騒然としている。大声で何事か叫び続ける人。飛び交う賽銭。次々と押し寄せる人波。

神宮には真冬の早朝、ゆつくりと参るのがベストのようだ。

悲恋物語り

藤代 由子

葦師寺の大椀

上から下から見上見下す

四百年経ち

雨もりの為打つ鉄板の跡

昔男女が恋をし

二匹のへびとなり

かなしい物語り

話はあるものと思

立去りがたく

何故か引きつける

枯木見る影もなし

鱗の様

むすばれない恋を悲しみ

この木に宿ると云う

昔も今も切ない

山里を後にする

平成六年度総会開催

一月二三日（日）福山城湯殿で、平成六年度備陽史探訪の会総会が開催されました。まず、記念歴史講演会が午後一時半から行われました。

講師は園尾裕先生（福山市教育委員会文化部長）で、演題は「朴齋・鯉水・朗慮」でした。

当日、外は猛烈な寒さでしたが、会場は熱気あふれていました。会員の真剣な態度を感じてとって下さったのか、園尾先生も予定時間を越えて、興味深い話をして下さいました。

講演終了後、四時半から総会が行われました。初めに田口会長が「備陽史探訪の会をただ続けるだけでなく、郷土のために何かを残していくことの必要性を痛感している。その意味で十五周年へ向けて、本年はよりいっそう活動を活発にしたい」と挨拶し、議事に移りました。

なお、活動報告、活動計画、決算、本年度予算等は次ページから掲載しますので参照して下さい。

引き続き五時半より、月見櫓で新年宴会が開催され、四名が参加しました。和やかな雰囲気の中、親睦を深め合い、これからの会の発展をたがいに誓いあいました。

平成5年度活動報告

(1)例会(含総会・記念講演会、1泊旅行、忘年会)

月 日	行 事	担当/講師	参加数
1/24	総会・記念講演「生涯学習と故郷学習」	村上正名	71名
3/7	大和町の史跡巡り(バス例会)	末森清司	52名
4/4	甲奴町の史跡巡り(バス例会)	熊谷操子・藤原一三	50名
5/5	第11回 親と子の古墳巡り(津之郷・赤坂)	古墳研究部会	約90名
5/30	美星町の史跡巡り(バス例会)	田口義之	56名
6/20	『古墳探訪』出版記念パーティー	事務局	48名
8/1	座談会「阿部正弘を語る」	田口・出内・後藤匡・平田	42名
10/10・11	1泊旅行「芸北吉川氏の史跡を訪ねて」	旅行委員(馬屋原他)	43名
11/21	秋の古墳巡り「庄原の古墳」(バス例会)	古墳研究部会	45名
12/5	赤坂町の史跡巡り(徒歩例会)	出内博都	約90名
12/19	忘年会(於ワシントンホテル)	役員会・事務局	41名

(2)郷土史講座(6/27 市民会館、12/23 ワシントンホテル以外は於中央公民館)

月 日	講 座 名	担当/講師	参加数
3/27	備後宮一族の興亡	田口義之	47名
4/17	油木の山城と土豪	出内博都	33名
5/22	古墳の編年	網本善光	28名
6/27	備南の弥生遺跡(囲郭と高地性から)	七森義人	23名
7/17	幻の備後国大神神社を推理する	平田恵彦	23名
9/18	油木の古墳と山城	田口・山口・出内・網本	32名
10/23	古墳時代の人々	山口哲晶	15名
11/28	小早川氏の居城高山城跡	末森清司	25名
12/19	吉備の古代寺院	岩本正二	41名

城郭研究部会活動報告

●平成四年度に続いて神辺町木之上城の調査を行う。

1/31 補足調査(地図作成)。

3/21 現地説明会と講演会。

(約一五〇名参加)

●1/15 油木町の山城補充調査。

(八ツ頭城、堀城、門田原宝篋印塔)

●11/23 赤坂町川上城の測量調査。

●12/4 「赤坂町の史跡巡り」担当。

●「中世を読む会」II 「小早川家文

書」を読解。小早川氏の領主制形

成過程についての文書研究。毎月

第三火曜日実施。

古墳研究部会活動報告

●一月〜四月、「古墳探訪」の編集作業。六月出版。記念パーティー。

●5/5 第11回「親と子の古墳巡り」担当。津之郷・赤坂の古墳。

●郷土史講座担当。

山口哲晶「古墳時代の人々」

網本善光「古墳の編年」

●11/21 第五回「秋の古墳巡り」

担当。庄原の古墳巡り(前方後円

墳を中心に)。

歴史民俗研究部会 活動報告

●部会としての活動は休止状態でした。今年も頑張る決意です。

平成6年度活動計画

(1) 例会(含総会、1泊旅行)

月 日	行 事	担 当 / 講 師	場 所
1/23	総会	事務局	福山城・湯殿
2/6	古代吉備王国探訪(鬼ノ城と榎築遺跡を中心に、バス例会)	七森義人・平田恵彦	吉備路
3/6	平賀氏の史跡巡り(頭崎城、鏡山城、バス例会)	末森清司	東広島=西条
5/5	第12回親と子の古墳巡り	古墳研究部会	未定
6/未	バス例会	古墳研究部会	未定
9/11	吉備の古代祭祀を探る旅(由加山、熊野神社等、バス例会)	歴史民俗研究部会	吉備路
10/9・10	1泊旅行	旅行委員	未定
11/13	秋の古墳巡り	網本善光	未定
12/4	福山市熊野町の史跡巡り(徒歩例会)	田口義之・黒木日出人	熊野町

(2) 郷土史講座・座談会・忘年会

月 日	講 座 名	担 当 / 講 師	会 場
1/23	総会記念歴史講座 朴斎・鰐水・朗慮	園尾裕	福山城・湯殿
3/5	特別郷土史講座 義倉創立の志	立石定夫	義倉会議室
4/未	第3回郷土史講座(題未定)	古墳研究部会	中央公民館(予)
5/未	第4回郷土史講座(題未定)	城郭研究部会	中央公民館(予)
6/未	第5回郷土史講座(題未定)	古墳研究部会	中央公民館(予)
7/9	第6回郷土史講座 スサノヲと蘇民将来伝説	平田恵彦	中央公民館(予)
8/4	歴史座談会 応仁の乱	事務局	中央公民館(予)
9/未	第7回郷土史講座 福山の神社と信仰	神谷和孝	中央公民館(予)
10/未	第8回郷土史講座(題未定)	城郭研究部会	中央公民館(予)
11/未	第9回郷土史講座(題未定)	田口義之	中央公民館(予)
12/未	忘年会、特別郷土史講座(題未定)	篠原芳秀	未定

*郷土史講座の大半は日程・会場が未定だが、原則的に〔第4土曜日〕・〔中央公民館〕を予定している。

城郭研究部会活動計画

- ・創立一五周年記念「山城探訪」出版のため、福山周辺の約三〇の山城の測量、研究調査、および執筆。
- ・例会、郷土史講座等は上記参照。
- ・中世を読む会「備後古城記」の読解研究。三月から毎月第三土曜日午後七時。於中央公民館。費用未定。第一回は三月一九日に実施。

古墳研究部会活動計画

- ・「山城探訪」出版の共同測量調査。
- ・第一二回「親と子の古墳巡り」、第六回「秋の古墳巡り」、例会、郷土史講座などは上記参照。
- ・四月から「古墳講座」開講。毎月第一土曜日、午後七時。於中央公民館。第一回は四月二日に実施。費用未定。

歴史民俗研究部会活動計画

- ・「山城探訪」出版の共同測量調査。
- ・郷土史講座担当。内容上記参照。
- ・九月バス例会担当。ミステリアー第二弾「吉備の古代祭祀を探る旅」。磐岩神社、円通寺と愛宕神社跡、倉敷理文センター。熊野神社、石洞神社、由加山蓮台寺等。
- ・不定期の学習会を実施。「備後の式内社」等を考慮中。費用未定。

平成5年度支出入決算報告

勘定項目	収入額	摘要	勘定項目	支出額	摘要
会費	419,500	173名	印刷費	699,122	古墳探訪、会報他
例会収入	116,958		印刷費	143,292	
古墳探訪他売上	248,500		事務費	16,012	
雑収入	77,635		会議等	4,810	
預金利息	15,207		講師料	32,000	
前年度繰越金	113,757		諸会費	13,000	
			広告費	10,300	
			雑費	5,044	
			繰越金	67,977	
総計	991,557		総計	991,557	

監査の結果上記の通り相違ないことを承認します。

監査委員 藤代由子 ㊟

堀エミ子 ㊟

平成6年度支出入予算案

収入の部			支出の部		
項目	予算額	摘要	項目	予算額	摘要
前年度繰越金	67,977		印刷費	120,000	会報・資料等
会費収入A	450,000	一般 150×3,000	山城志	250,000	出版代金
会費収入B	40,000	夫婦 10×4,000	通信費	170,000	
雑収入	90,000		一般経費	80,000	講師謝礼等
書籍売り上げ	112,500	1,125×100	山城調査費	100,000	
			予備費	40,477	
総計	760,477		総計	760,477	

以上原案通り、総会において満場一致で可決承認されました。

平成六・七年度役員決定

総会において、役員が以下の通り決定、承認されました(任期二年)。

名誉会長 神谷和孝

会長 田口義之

副会長 山口哲晶、中村勤史

＊馬屋原亨

参与 中村晃、末森清司、後藤匡史

佐藤洋一、種本実、棗田英夫

(事務局)

事務局長 七森義人

局長 佐藤秀子(会計担当)

金永真澄、佐藤錦士

井上良三、＊平田恵彦

(会報担当)

(歴史民俗研究部会)

部会長 神谷和孝 副＊平田恵彦

(古墳研究部会)

部会長 山口哲晶 副 網本善光

(城郭研究部会)

部会長 山内博都 副 杉原道彦

★会計監査委員

＊藤井忠夫、＊杉原外志子

＊印は新任

監査委員の藤代由子さん、堀エミ子さんは今回退任されました。長い間本当にありがとうございました。

『山城探訪』 発行のための調査始動

備陽史探訪の会創立一五周年を記念して出版する『山城探訪』の調査が、一月一六日(日)から開始されました。

第一回は、沼隈郡の「矢繰城」および「丸山城」で、田口会長以下九名が参加しました。当日は絶好の調査日和で、会長の指導のもと十分な調査をすることができました。

引き続き、青ヶ城、阿草山城、近江城、殿奥城の調査も終了しました。今後の調査予定は左記の通りです。興味のある方・希望者は誰でも参加できます。事前に担当者または事務局に連絡をとり、集合場所や時間等の確認をして参加して下さい。

①二／二七(日) 赤柴山城

福山園芸センター 八・三〇集合
(担当 七森義人)

②三／一三(日) 淵上城

府中東高校集合 九・〇〇集合
(担当 杉原道彦)

③三／二〇(日) 折敷山城

坪生公民館集合 八・三〇集合
(担当 網本善光)

④三／二七(日) 陶山城

笠岡市役所集合 八・三〇集合
(担当 網本善光)

『山城志』第12集原稿募集

今年度発行『山城志』第12集の原稿を募集します。

原則として、日本史・郷土史に取材した論文、随筆、紀行文、小説ですが、あまり厳密に考えてはいませんので、気楽に投稿して下さい。

字数は四〇〇字詰め原稿用紙一〇枚程度です。第一回の原稿締切りは四月末日とします。

事務局としては、原稿が集まり過ぎて困ったと、嬉しい悲鳴をあげたのですが、不幸にして予定した量の原稿が集まらなかった場合には、随時原稿締切りを繰り下げる予定です。原稿の送り先は事務局です。

次回で会報も

いよいよ六〇号

記念号の原稿募集

『備陽史探訪』も、次号(五月末発行予定)で創刊第六〇号を迎えます。

そこで、この号は記念特大号にして、より充実したものにしようと考えています。

歴史論文、短歌、俳句、例会参加報告、紀行文など内容は問いません。字数は四〇〇字詰め原稿用紙五〜六枚程度。原稿締切りは四月末日。どうか奮って事務局まで原稿をお送り下さい。

新入会員紹介

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会
個人情報が含まれるため掲載できません。

事務局日誌

- ◎例会、郷土史講座の詳細12P参照。
- 十月二三日(土) 第七回郷土史講座。十月三十一日(日) 備陽史探訪58号発送作業。於中央公民館。六名。
- 十一月一六(火) 「中世を読む会」
- 「小早川家文書」於中央公民館。
- 十一月十三日(土) 役員会。参加七名。「山城探訪」発行の打ち合わせを中心に。於中央公民館。
- 十一月二一日(日) 「庄原古墳巡り」
- 十一月二八日(日) 第八回郷土史講座。終了後、忘年会案内の発送作業を皆様にお手伝いいただき感謝。
- 十二月五日(日) 「赤坂町史跡巡り」
- 十二月一九日(日) 役員会。忘年会。四一名。於ワシントンホテル。
- 十二月二一日(火) 「中世を読む会」
- 「小早川家文書」於中央公民館。
- 一月九日(日) 総会案内発送作業、山城調査の打ち合わせ。参加九名。
- 一月一六日(日) 丸山城、矢繰城測量調査。参加九名。
- 一月二三日(日) 役員会、総会、記念講演会、新年会。参加四四名。
- 於福山城湯殿、月見櫓。
- 一月三〇日(日) 青ヶ城測量調査。参加一〇名。

特別郷土史講座開催

昨年の「古墳探訪」は財団法人義倉から補助金をいただき、発行することができました。福山において義倉の果たした役割は、特筆すべきものがあります。

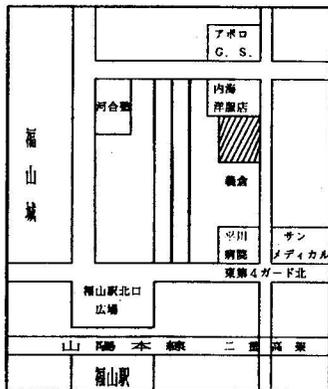
義倉の歴史とその設立意義について立石定夫先生がお話し下さいます。

実施要項

期日 三月五日(土)
時間 ①午後一時半～二時
義倉資料室見学
②午後二時～三時 特別講座
③午後三時～

会場 財団法人義倉会議室
福山市城見町一四一二五
☎三三〇六三一

講師 立石定夫先生
演題 義倉創立の志
会費 無料



平賀氏の史跡巡り

これが山城だ！
頭崎城と鏡山城に挑戦する

城郭研究部会が、末森さん(当会参与)を講師にお迎えして「平賀氏の史跡巡り」を企画しました。

毎年三月の例会は「末森例会」として定着しており、この例会がないと、備陽史探訪の会の本当の新年が始まらないという人もいるほどです。

山城を知り尽くした末森さんが今回選んだのは「頭崎城」と「鏡山城」です。それぞれ平賀氏と大内氏が構築した戦国時代の山城で、石垣や堀切等の遺構がよく残っており、山城ファンにとって垂涎の的です。

山城以外では平賀氏の墓所、三ツ城古墳などを探訪する予定です。みなさんご参加を心よりお待ちしております。

その他 雨天決行。弁当・飲み物持参。山歩きの出来る服装でご参加下さい。

★当日、雨天の場合は山城への登山は中止します。代わりに西条の史跡巡り(並滝寺、御茶屋本陣跡、安芸国分寺跡、福成寺等)を致しますので、ご了承下さい。

★二月六日の例会時、既に三十名を越える申し込みがありました。残りあとわずかです。前回、キャンセル待ちになって失敗したと思っただ方も多かったはず。参加希望の方は、事務局まで電話または葉書で至急お申し込み下さい。

会費改定について

今年度会費は郵便料金値上げが発表される前に決められたものでした。ところが、先般料金が値上げされ、郵送料が増大して会の会計に支障をきたす恐れが出てきました。

そこで、今年一年間の推移をみた上で、その必要があると役員会が判断した場合には、来年度から年会費を五〇〇円値上げ(一般会員は三五〇〇円、夫婦・親子会員は四五〇〇円)することが、一月二三日の総会で提案され、満場一致で承認されました。ご了承下さい。

『中世を読む』発刊!

城郭研究部会の機関誌「中世を読む会」第三・第四合併号が二月六日出版されました。
掲載論文は田口会長「高須三郎左衛門尉景勝について」など四編で力作揃いです。

頒布価格は一部千円。購入希望者は事務局までご連絡下さい。

計報

平成六年一月五日、永眠されました。心からご冥福をお祈りいたします。合掌。

会計より会費未納の会員の皆様へ

会員の継続をご希望の方で、本年度会費(三千円)をまだ納めていらっしゃらない方は、同封の郵便為替でなるべく早く納入して下さい。もし、三月末日までに納入されない場合には、退会されたものとみなします。ご了承下さい。

備陽史探訪の会事務局
〒七二〇 ☎(五三)六一五七
福山市多治米町五一九一八

日程 平成六年三月六日(日)
集合時刻 午前七時四十分
集合場所 福山駅北口
(福山キャッスルホテル前)
会費 会員 三五〇〇円
非会員 三八〇〇円
定員 五〇名

実施要項